災害調査報告： 令和元年台風 19 号
被災地調査―福島―（速報）

関西大学社会安全学部　准教授　近藤誠司　　2020.2.15.

１．　はじめに

2019 年 10 月 6 日 3 時に南鳥島近海で発生した台風第 19 号は、大型で猛烈な台風に発達した後、12 日 19 時前に伊豆半島に上陸し、関東地方を通過した。記録的な大雨により、12 日 15 時 30 分に静岡県、神奈川県、東京都、埼玉県、群馬県、山梨県、長野県、19 時 50 分に茨城県、栃木県、新潟県、福島県、宮城県、翌 13 日 0 時 40 分に岩手県の合計 1 都 12 県に対して大雨特別警報が発表された。各行政機関・報道機関は、広域なエリアに向けて、同時・並行的に対象住民に切迫感を伝えようとしていたが、受け止め方には温度差があった。

死者・行方不明者は 100 名を超える（総務省消防庁, 2019: 第 65 報）。全壊家屋数は 3 千を超え、半壊家屋数も 3 万弱に及んだ。

本報告では、関西大学校友会福島支部の協力を得て、発災約 2 週間後、10 月 27 日から 28 にかけて、2 日間の日程で被災地の状況を調査した概要を記し、今後の支援の可能性などを探索する。

２．　調査地その１　福島県西郷村

初日は、福島県西郷村にて、校友会の福島支部長にヒアリングをおこない、住民にも台風襲来時の状況を聞くなどした。また二日目の午前中には、西郷村役場にて防災担当職員にヒアリングをおこなった。

ヒアリングによれば（**写真 1**）、西郷村では、全戸に防災無線の子機が配備されているため、それを使って避難準備を呼びかけるなどしていた。しかし、避難所に赴く住民は少なかったという。

幸い、今回は人的被害の発生には至らなかったが（**写真 2**）、事後の課題として、個々人に向けて防災情報を伝達し、避難行動を喚起する実効性ある方策が必要であることが確認された。

写真 1　西郷村役場でのヒアリングの様子

写真 2　西郷村内の土砂流出現場

この点に関しては、報道等でもすでに課題視されていたことから、今回、防災無線を日常的に活用することを大学側から提案し、「毎週月曜日の就寝前に防災ひとくちメモが放送される」ルーティーンを、試行的に年度末まで具現化してみることになった（**写真 3, 4**）。

写真 3　防災無線を活用した防災放送

写真 4　防災放送の登録画面

３．　調査地その２　福島県須賀川市

二日目の午後からは、校友の案内を受けて、須賀川市の被災地を調査した。現場を歩き、情報を集める中で、重層的な課題があることが見出された。以下に概括しておく。

須賀川市の調査では、大きな被害を受けた保育所の視察（**写真 5**）と、犠牲者を出したアパート周辺の調査を実施した（**写真 6**）。現場は防災無線の屋外スピーカーのすぐそばであったにもかかわらず、外階段の付いたアパートの 1 階で、逃げ遅れによる死者を出したことは、現地でも衝撃をもって受け止められていた。この場所は、1980 年代にも浸水被害を受けていたことなどから、情報伝達の問題のみならず、経験の継承と共助の確立など、課題が多い。今回、奇しくも無事だった人たちが、次の「油断」を生んでしまう可能性もあり、今後も注視して縦断的な調査・実践を行っていく必要があるだろう。

写真 5　被災した保育所

写真 6　犠牲者が出た現場周辺の調査

参考文献

総務省消防庁（2019）令和元年台風第１９号及び前線による大雨による被害及び消防機関等の対応状況（第 65 報），
https://www.fdma.go.jp/disaster/info/items/taihuu19gou65.pdf　（2020.2.15. 情報確認）

謝辞：
本調査には、遠藤防災事務所による助成を受けました。この場を借りて御礼申し上げます。

本稿に関する問い合わせ
関西大学社会安全学部　准教授　近藤誠司
072-684-4000　kondo.s〇kansai-u.ac.jp
〇の箇所に@を挿入してください